

---

# 寝息

蒼風

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
寝息

【Nコード】  
N4459K

【作者名】  
蒼風

【あらすじ】  
ある夫婦の、とある一日のお話

「たっだいま」

うっ、寒い寒い・・・と、かじかんだ手をこすりながら僕はドアを開けた。

薄暗さになれていた視界が、突然光に包まれる。

眩しそうに目を細めながら、僕は凍ったように冷たくなった靴を脱ぎ捨てた。

外の空気とは違った、暖かなぬくもり。

それが、買ったばかりのストーブのせいだけじゃないと思った自分に、小さな苦笑を返す。

そう、いうなれば、人のぬくもり。

一人暮らしの時には感じられなかった暖かさが、僕の部屋を包み込んでいた。

音を立てないように気を付けながら、ゆっくりと奥の方へと進んで行く。

居間まできたところで、自分の想像したとおりの姿がコタツに突っ伏してるのを発見した僕は、苦笑のような、嬉しそうな、よく分からない笑顔を浮かべた。

小さな寝息をたてているのは、僕の奥さん。

彼女が僕の風景に溶け込んで、まだ二ヶ月しか経っていないけれど、それでも、僕にとってその風景はひどく当たり前のように感じられた。

彼女が居る部屋。

僕の、この世でもっとも愛しい寝顔。

自然に浮かんでくる微笑をそのままにして、だらしない寝顔を覗いてやろうと近づいた僕は、コタツの上に置かれた一枚の紙に気づいた。

帰ってきたときに私がねてたら起こしてね。      っていうか、起こせ！

「なんで命令形なんだよ」

紙の上に踊る女性らしい文字にため息を吐きつつも、僕は壁に掛けてある時計に目を走らせた。

黒い鋭角の針は、午前二時を示している。

もう、深夜だ。

そんな時間に起こしていいものかどうか、僕は顎を撫でながら考えていた。

こんな時間に起こすのはとても可哀想だけれど、彼女は起こさないといめちやくちや怒る。

そう、あれは一週間ほど前のことだ。

その日も僕は、仕事先の関係で帰りが遅くなってしまった。

部屋の中には同じように彼女の寝息。

こんな時間まで自分を待とうとしてくれた彼女に、少し申し訳なく思いながら、僕は小さな体を抱き上げた。

起こさないように気を付けながら、そっとベッドまで運ぶ。

彼女の寝息は、とても暖かった。

だが

翌日の朝

「何で起こしてくれなかったのよおおおおお！……！」

「え？だつて……可哀想だと思つて……」

「可哀想なんかじゃない！可哀想だとおもうんなら、起こしてくれば良かったのに！！」

「なんだよ、そんなに怒ることないじゃんか！それに、なんで起きなきゃならないんだよ！せつかく寝てるのに……」

「……だつて……私が寝てる隙に帰ってくるなんて……ずるいじゃん……」

それは、あきらめるくらいにくだらないうがまま。

でも、そのわがままは、僕にとって最高の言葉だった。

「つて、これじゃ、のろけだろ！」

小声でつつこみを入れてみた。だが、当然のことのように、聞いている者は誰もいない。

「……ちょっと悲しかった。

「まったく……お前のせいだぞお……」

なにがどう彼女のせいか自分にも分からなかったが、恨みがましそくにほっぺをつついてみた。

ぶにぶにぶに……

柔らかい。

んで、それと共に、聞こえてくる寝言。

なんだかちょっとかわいく思えた。

まあ、それはおいといて……。

「どうするか……だな」

再び顎に手を当てる僕。

気分は推理小説の主人公（大げさだけど）。

静まり返った部屋の中に、愛しき君の寝息だけがこぼれる。

それからたつぷり呼吸二つ分ほどの時が経ち……。

「……ん」

アイデアをおもいついた……というよりも、他に手段を見いだせなかった僕は、必要以上の無表情さで歩を進めた。

一週間前と同じように、彼女の体をそっと抱き上げる。

体重計に乗るたびに悲鳴を上げるくせに、腕の中の暖かい重さは思いのほか軽かった。

起こさないように、揺らさないように、優しく歩く僕。

ベッドまで運び、寒くないようにしっかりと布団を掛けてあげる。

しばらくの間、彼女の寝顔を見つめて……。

彼女がくるまれた布団を、そつともちあげる。

外気に触れたため、ぶるぶると震える彼女に、少し申し訳ない気持ちを抱きながら、僕はその布団の中に潜り込んだ。

まだスーツを着たままだけれど、シワになるのもかまわないと思つた。

なんとなく……そう、なんとなくだけれど……そうしたいって思つたんだ。

寒さに顔をしかめていた彼女が、僕の体をぎゅっと抱きしめる。

しかめられた顔が、途端に緩んでいく。

首に掛かる吐息をくすぐったく思いながら、僕は自分でも気づかないうちに彼女の頭をそつと撫でていた。

彼女に浮かぶ微笑みが、さらに深くなる。

たまらなく愛しい気持ちに襲われていた僕の目の前で、彼女が言葉を漏らした。

僕の、名前。



夢の中にまで僕が出ていることをくすぐったく思いながら、僕は静かに目を閉じた。

明日、君が目を覚ますと、僕は隣で寝息をたてている。

僕を優しく揺り起こしてよ。

いま、君を起こしてあげることにはできないけれど。

僕の寝顔を見つめる時間をあげるから。

ずるいだなんて……言わないで、ね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4459k/>

---

寝息

2010年10月11日20時46分発行